

OSFだより

第102号 2010(H22)年6月



発行・編集 財団法人岡本国際奨学交流財団 263-0023 千葉市稲毛区緑町1丁目19番11号 TEL043-248-8808 FAX043-238-4138
osf-midorii1911@codan.ocn.ne.jp http://www.osf-family.com

OSF(Okamoto Scholarship Foundation)の活動案内 1、留学生宿舍の運営 2、留学生へ奨学金の支給 3、留学生の学習&人生相談・国際交流

大学・会社は遊園地ではない

会長 岡本 正

以前にソニーの創業者、盛田社長が、この表題で論文を書かれ、大きな話題になったことがある。

先日曾野綾子さんが「学業優先の責務」という題でサンケイ新聞に論文を載せられた。曾野さんは作家、評論家として現在日本のトップクラスの方で、私の最も尊敬する人の一人だ。同時に国際的なボランティア活動家でもあり、日本最大の財団「日本財団」の会長も長くなされた。以下、曾野さんの文を載せる。

「聖心女子大の先生が担当クラスの学生、41人に質問したら、新聞を読んでいる学生はたった4人。日本がアメリカと戦ったことを知っている人は約半分の21人しかいなかった。

聖心女子大学は私の母校であり、皇后陛下も同窓だ。名前もよく知られている。しかし、私が会社の社長だったら新聞を読まない学生は採用しない。若者だったら結婚相手として困る。

一人の若者が、20歳を過ぎるまで、生活の大部分を学業優先でいかせてもらえるという恵まれた人生は、世界にはそれほど多くはないのだ。幸運は深く感謝して受けてよい。しかしその場合、幸運を受けたことに対し、社会的責務を感じるべきだ。大学というところは勉強の好きな若者だけが勉強に行く所だ。遊園地ではない。」

何年も前のことだが、文化勲章をもらった東大教授(経済学)の話聞いた。紹介する。

「私は長く英国のオックスフォード大学で教えてきた。学生はすべて入学の際、大学に誓約書を出す。『私はこれからの一生を、英国並びに国民のために捧げます。』そして全員が寮に入り、担当教授から指導者教育を受ける。」ケンブリッジ大学も同じ。

今度の43歳の英国首相も、こういう過程を経て就任したのだろう。このことを「ノーブレス・オブリージュ」(フランス語)という。高い身分にはそれ相応の義務を伴う、ということだ。

皆さんもそれぞれの母国から選ばれて留学してきたエリートだ。同世代の若者より恵まれた環境を与えられている。いずれ将来帰国した時には、各分野におけるリーダーになる人々だ。誠実な大学生活を送ることは皆さんの義務だ。

私は曾野さんの文を読んで、思わず涙ぐんでしまった。戦死した多くの友人は地下で嘆いているだろう。「僕らは何故、戦死しなければならなかったのか」と。先年フランスのノルマンディ上陸作戦の激戦地へ行った。何万何千という白い十字架の墓標が、見渡す限り整然と並んでいる。攻める英・米・仏と、守る独の若者たちの死を弔っている。

戦死者には何のミスもない。ただ、愛国心と誇りを背負って死んでいったのだ。アジアの戦争も全く同様だ。日本だけでも三百万人が戦死している。

誰も死にたくて死んだのではない。国と公共への忠誠のために戦ったのだ。それから六十年余。大学生の半分がこの戦いを知らない。こんなことが許されてよいのか。みなさん、どうか歴史、特に近代・現代史をよく理解してください。多くの青年たちの尊い犠牲の上に、現在の人間の生活と進歩があることをわかってほしい。

盛田社長・曾野さんと同じく私も「大学は遊園地ではない。勉強が嫌いなら、大学へ行くな。」と、声を大にして言いたい。幸いにして、留学生の皆さんはよく学び、よく働き、それぞれ素晴らしい業績をあげている。昨日も、千葉大理学部で学位(水の研究)をとった学生が、就職の挨拶に来た。日本企業に入り、母国の農業の発展に従事する由。私もうれしい。がんばってください。期待をしている。

李 潤貞(奨学生)

韓国(ソウル市)

神田外語大学外国語学部

国際コミュニケーション学科

日本に来て一番感動したこと



日本に来てもう4年半が過ぎた。念願していた日本の留学が決まり、溢れ出す期待を胸にはるばるやってきた日本。しかし、いざ日本に来てみたら、自分の故郷である韓国とさほど差のない景色、そして人々の外見に「私は本当に日本に来ているのだろうか」と思った時もあった。しかし、それは私がまだ日本のほんの一部しか見ていなかったからであった。

私が初めて日本に来た時の季節は夏だった。日本人は季節ごとの行事を大事にし、皆で楽しむというとても素敵な習慣がある。その行事に初めて参加したのが、夏の花火だった。友達に誘われ訪れた花火大会場で、私はとても驚いた。多くの若者が日本の伝統衣装である浴衣を着ていたからだ。誰一人恥ずかしがることなく、堂々と浴衣を身に纏っていた。韓国にも「ハンbok」という昔からの伝統衣装があるが、今では、あまり着られていない。若者では特に着られることのない衣装となってしまうのだが、日本では昔からの衣装が若者達の中で違和感なく着られて

いたのだ。カルチャーショックだった。こんなにも自分たちの伝統衣装を綺麗に楽しむなんてと思い、羨ましくも思えた。「和」を感じさせる人々の姿からちゃんと自分達のものを守っているような気がして、私がこれから日本で学べるもの、そして感じるものはたくさんあるだろうと思い、心の底から日本に来てよかったと思った。

日本では浴衣だけではなく、「畳」も多くの家で使われている。新築の家を建てるとしても畳の部屋を作る人が多い。経済がますます成長し、時代が速い速度で変わっていても、「和」を愛する日本人の心は昔から変わりのないものだなと思った。

「日本らしいことが日本の一番の力」私はそう思う。日本の「和」の魅力につられ、今は日本の「和」に「和まれる」毎日。まだ私の知らない日本の「和」をもっともっと経験していきたい。

宋 馳(奨学生)

中国(遼寧省)

千葉大学 理学研究科 基盤理学専攻

日本に来て一番感動したこと



私はジャパン・テントのことを2年前から知っていたのですが、本当に参加できるようになったのは今年です。石川県へ出発する前に、自分と同じ目標、日本で学んでいる世界各地の留学生と出会って、普段触れない日本の伝統文化を体験することができれば最高だと思いました。実際に行ったら、しみじみ感じたのは何よりもホストファミリーの温かい心でした。

一週間のホームステイは、金沢市のホストファミリーのところに泊まりました。

ホストファミリーの方は新聞配達という仕事をやっている72歳のお父さんです。お父さんは週6日、毎日朝2時から6時まで朝刊、夕方4時から5時まで夕刊を配達するという大変な仕事をしています。お父さんは風呂の付かない古いアパートに住んでいるため、毎日、夕方頃に僕らをお風呂屋さんに連れて行きました。また、普段一人で絶対食べない贅沢な焼き肉、刺身、寿司などいろいろな美味しいものも食べさせてくれました。多くのお金がかかりました。月収10万円未満のお父さんには大きい負担がかかったと思いました。お父さんは自分が節約の生活をしているのですが、私たちをそこまで招待するとは思いませんでした。最も感動したのは、お父さんが毎日深夜の仕事が終わって一時間しか休憩しないで、僕らを遠いイベント

会場まで自転車で送ってくれたことです。それから一人で家に戻って、イベントが終わる時にまた自転車で迎えてくれたことです。別れる日、自分の名前と住所を教えるように思ったら、お父さんは「いいよ、教えてくれてもいつか忘れるから、一緒に撮った写真を送ってくれればうれしい」と言われました。

ジャパン・テントに参加することで、金沢市の人が大好きになりました。更に日本のことが好きになって、日本を見直しました。石川から戻ってきて、なぜジャパン・テントに参加した人がホストファミリーたちと別れる時に、涙を流しながら手を振っていたかとよく考えました。私たちを感動させたのはいったい何でしょう。美味しい食事でもなく、美しい景色でもなく、国境なしの人と人の心のふれあい、ピュアな心だと思います。みなさんは情熱の心で私たちを感動させました。私たち留学生は、専門知識をきちんと身につけることだけではなく、国際人として心の扉をひらいて、世界中の人々と積極的にコミュニケーションをし、世界友好のかけ橋になるべきではないかと考えました。

～陳君のご冥福を祈って～



6月2日早朝、思いもかけない悲しい知らせを受け取った。OBの蔡君(台湾)からだった。「陳君が5月31日の夜、中国の自宅で睡眠中に他界してしまいました。」頭の中が真っ白になった。誤報か？あるいはジョークか？だが、第2報も来た。誤報ではなかったのだ。寝ている間に過労死でなくなったとのこと。悲しくて言葉が出ない。

陳信志君が会館に入居したのは2002年の春で、以後東京情報大学を卒業するまでの3年間、みんなと起居を共にした。彼は一言で言えば、義理人情に厚い人間臭い男であった。酒とカラオケ、ボーリングが大好きで、酔っ払って会館で大騒ぎをしたこともあった。優しい男らしい彼の性格は、会館生みんなに愛されていた。

卒業後故郷の台湾に戻り、IT関係の会社の営業を任せられ、中国で昼も夜もなく飛び回っていた。仕事を頑張りすぎたのだろう。結婚して、子供が生まれたばかりだった。

亡くなる3週間前に4年ぶりに西千葉へ来てくれ、楽しく杯を重ねたばかりだった！新婚生活や子供の自慢を明るく話していたのに！陳君の仲間からたくさんのメールをいただいた。一部紹介したい。(理事長記)



会館生と共に



年忘れパーティで



会館生とスキーツアー



お祭りに参加して

- ・貝漫(H12、台湾)：何で！！信じられない！！怖くて鳥肌が立っています。本当に悲しいです。人生をもっと大切にしよう。陳君のためにも、悲しみを乗り越えて、がんばりましょう。
- ・モニラ(H18、カンボジア)：突然の知らせでショックです。辛いです。一緒に楽しくボーリングをやったのに。何で陳君の人生はそんなに短い？言葉が出ません。
- ・ダム(H16、ラオス)：陳君、お疲れさまでした。ずっと友達だよ。
- ・李秀賢(H14、韓国)：何があったんですか。信じたくありません。何回もメールを読み直しました。悔しいです。
- ・孫琦(H15、中国)：陳君は長生きすると信じていたのに。悲しくてやりきれない。
- ・丁雅萍(H14、中国)：優しい陳兄ちゃん、天国でおいしいお酒を飲んでね。
- ・徳志偉(H12、中国)：悲しいです。連休中に来ると連絡もあり、突然すぎます。このやるせない気持ちは誰にぶつけられればいいのか。幼い子供と奥さんを残して。
- ・ニヴェ(H11、ネパール)：本当に陳信志君ですか？この前、結婚して子供が生まれたと聞いたけど。信じたくない！陳君がビールを飲みながらカラオケで歌っている姿が忘れられません。
- ・林碧虹(H15、マレーシア)：ショック！子供が生まれたばかりなのに。本当にかわいそう。
- ・コン(H14、カンボジア)：

6月2日、予期せぬ知らせのメールが届きました。「チンが永眠した」。えっ！あのチン？自分の目に疑いを持つ一瞬でした。何と悲しい！あの声のでかいチン？あのボーリングのうまいチン？あの「なつくさがー」のチン？あの優しいチン？... 色々な思い出が昨日の出来事のように頭の中に蘇ってきました。なぜチンのような元気で男らしい人がこんなに早くこの世を去ったのか。

チンは私たちの永遠の友人です。

最後にチンに一言送ります。

「本当に楽しかったよ。ありがとうチン！」

ご家族と共にご冥福を祈ります。

陳君との思い出は、いつまでも会館生に語り継がれていくことだろう。安らかに眠ってください。



ボーリング場で



会長夫妻と

トピックスTopics!

奨学生の房総一泊旅行

- ◎ 5月15、16日 奨学生の一泊旅行があった。
今年は房総の南を巡る旅で、鋸山にも登ることができた。
天気も穏やかな快晴で、海の向こうの島々も
はっきりと浮かんでいた。
鴨川シーワールドも時間がたっぷりあったので、
ゆっくり楽しむことができた。



会館生6月例会



奨学生6月例会

結婚おめでとう！！

- ◎ 5月、シム・ティナさん(H6奨学生、マレーシア)が故郷で結婚式をあげた。
～いつまでもお幸せに！～

日本語教室始まる

- ◎ 4月20日、今年度の日本語教室が始まった。
木曜日の能力試験受験クラスは試験の形態が今年度から変わるため、多くの学習者が集まって真剣に勉強している。

帰国

- ◎ 4月14日、崔建軍さん(H17奨学生、中国)、寧唯西(日本語学習者)夫妻が帰国の挨拶に来団してくれた。
◎ 4月19日、権聖君(H15会館生、中国)、23日徐媛娜さん(H20奨学生、中国)がそれぞれ学業を終えて、帰国していった。
後に残る我々は寂しい限りだが、みなさん希望にあふれた若者ばかりだ。
～それぞれの分野でがんばってください。～

- ◎ 6月6日、モニラ君(H16会館生、カンボジア)が来日。財団に挨拶に来てくれた。精米機を作る日本企業に就職。今秋まで日本で研修とのこと。
応援しています！

役員会

- ◎ 6月9日、財団の役員会開催。
財団の一年間の成果を報告する大事な会議である。
新しく清古高志さんが専務理事に、小林忠則さんが評議員に就任なさいました。これからよろしくお願いいたします。
会議終了後は留学生を交えての交流会を楽しみました。
料理を作ってくださった留学生のみなさん
ありがとうございました。



会館入居

- ◎ 4月29日、グエン・タン・ホアン君(ベトナム、千葉大)5月9日、崔太郎君(中国、神田外大)がみつわ台会館に入居。
みんなとすぐに仲良くなって、
会館生活を楽しんでいるようだ。

